

# 平和とは

基督教独立学園クリスマス記念講演

鈴木寛 (Hiroshi Suzuki)

国際基督教大学名誉教授

2025年12月22日

## 讃美歌 初版1954年12月1日

### ■讃美歌98番ルカ 2:14

1. 「あめにはさかえみ神にあれや、 つちにはやすき人にあれや」と、  
みつかいたちのたたうる歌を ききてもらびと共によろこび、  
今ぞうまれし君をたたえよ。
2. さだめたましし救いのときに、 かみのみくらをはなれて降り、  
いやしき賤の処女にやどり、 世びとのなかに住むべき為に、  
いまぞ生まれし君をたたえよ。
3. あさ日のごとくかがやき昇り、 みひかりをもて暗きを照らし、  
つちよりいでし人を活かしめ、 つきぬいのちを与るために、  
いまぞ生まれし君をたたえよ。

### ■讃美歌228番マルコ 1:15

1. ガリラヤの風かおるあたり、「あまつ御国は近づけり」と、  
のたまいてよりいく千歳ぞ、 きたらせたまえ、 主よみ国を
2. たたかいの日に、 いこいの夜に、 みくにをしたうあつきいのり、  
ささげられしはいく千度ぞ、 きたらせたまえ、 主よ、 み国を
3. 憎み、 あらそい、 あとを絶ちて、 愛と平和は四方にあふれ、  
みむねの成るはいずれの日ぞ、 きたらせたまえ、 主よ、 み国を

## 聖書

■マルコ4:35-5:21（新共同訳） 4:35 その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。36 そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。37 激しい突風が起り、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。38 しかし、イエスは艤の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。39 イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凧になった。40 イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」41 弟子たちは非常に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った。

5:1 一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。2 イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた靈に取りつかれた人が墓場からやって來た。3 この人は墓場を住まいとしており、もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかった。4 これまでにも度々足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は碎いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかったのである。5 彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたいたいたりしていた。6 イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、7 大声で叫んだ。「いと高き神の子イエス、かまわないとおぼれてくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」8 イエスが、「汚れた靈、この人から出て行け」と言われたからである。9 そこで、イエスが、「名は何というのか」とお尋ねになると、「名はレギオン。大勢だから」と言った。10 そして、自分たちをこの地方から追い出さないようにと、イエスにしきりに願った。11 ところで、その辺りの山で豚の大群がえさをあさっていた。12 汚れた靈どもはイエスに、「豚の中に送り込み、乗り移らせててくれ」と願った。13 イエスがお許しになったので、汚れた靈どもは出て、豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下つて湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んだ。14 豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。人々は何が起こったのかと見に來た。15 彼らはイエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしくなった。16 成り行きを見ていた人たちは、惡靈に取りつかれた人の身に起こったことと豚のことを人々に語った。17 そこで、人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたいと言いました。18 イエスが舟に乗られると、惡靈に取りつかれていた人が、一緒に行きたいと願った。19 イエスはそれを許さないで、こう言われた。「自分の家に帰りなさい。そして身内の人々に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。」20 その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。人々は皆驚いた。

21 イエスが舟に乗って再び向こう岸に渡られると、大勢の群衆がそばに集まって來た。イエスは湖のほとりにおられた。

■マルコ4:35-5:21（聖書協会共同訳） 4:35 さて、その日の夕方になると、イエスは弟子たちに、「向こう岸へ渡ろう」と言わされた。36 そこで、彼らは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。37 すると、激しい突風が起り、波が舟の中まで入り込み、舟は水浸しになった。38 しかし、イエス自身は、艤の方で枕をして眠っておられた。そこで、弟子たちはイエスを起こして、「先生、私たちが溺れ死んでも、かまわないのですか」と言った。39 イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言わされた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。40 イエスは言わされた。「なぜ怖がるのか。まだ信仰がないのか。」41 弟子たちは非常に恐れて、「一体この方はどなたなのだろう。風も湖さえも従うではないか」と互いに言った。

5:1 一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。2 イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた靈に取りつかれた人が墓場から出て来て、イエスに会った。3 この人は墓場を住みかとしており、もはや誰も、鎖を用いてさえつなぎ止めておくことはできなかった。4 度々足枷や鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり足枷を碎くので、誰も彼を押さえつけることができなかつたのである。5 彼は夜も昼も墓場や山で叫び続け、石で自分の体を傷つけていた。6 イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、7 「いと高き神の子イエス、構わないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい」と大声で叫んだ。8 イエスが、「汚れた靈、この人から出て行け」と言わされたからである。9 イエスが、「名は何と言うのか」とお尋ねになると、「名はレギオン。我々は大勢だから」と答えた。10 そして、自分たちをこの地方から追い出さないようにと、しきりに願った。11 ところで、その辺りの山に豚の大群が飼ってあった。12 汚れた靈どもはイエスに、「豚の中に送り込み、乗り移らせててくれ」と願った。13 イエスがお許しになったので、汚れた靈どもは出て、豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れは、崖を下って湖になだれ込み、湖の中で溺れ死んだ。14 豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。人々は何が起こったのかと見に来た。15 そして、イエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしくなった。16 成り行きを見ていた人たちは、惡靈に取りつかれた人に起こったことや豚のことを人々に語つて聞かせた。17 そこで、人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたいと願い始めた。18 イエスが舟に乗ろうとされると、惡靈に取りつかれていた人が、お供をしたいと願った。19 しかし、イエスはそれを許さないで、こう言わされた。「自分の家族のもとに帰って、主があなたにしてくださったこと、また、あなたを憐れんでくださったことを、ことごとく知らせなさい。」20 そこで、彼は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことを、ことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。人々は皆驚いた。

21 イエスが舟で再び向こう岸に渡られると、大勢の群衆がそばに集まって來た。イエスは湖のほとりにおられた。

■マルコ4:35-5:21（口語訳） 4:35 さてその日、夕方になると、イエスは弟子たちに、「向こう岸へ渡ろう」と言わされた。36 そこで、彼らは群衆をあとに残し、イエスが舟に乗っておられるまま、乗り出した。ほかの舟も一緒に行った。37 すると、激しい突風が起り、波が舟の中に打ち込んできて、舟に満ちそうになった。38 ところが、イエス自身は、艤

の方でまくらをして、眠っておられた。そこで、弟子たちはイエスをおこして、「先生、わたしどもがおぼれ死んでも、おかまいにならないのですか」と言った。39 イエスは起きあがって風をしかり、海にむかって、「静まれ、黙れ」と言われると、風はやんで、大なぎになった。40 イエスは彼らに言われた、「なぜ、そんなにこわがるのか。どうして信仰がないのか」。41 彼らは恐れおののいて、互に言った、「いったい、この方はだれだろう。風も海も従わせるとは」。

5:1 こうして彼らは海の向こう岸、ゲラサ人の地に着いた。2 それから、イエスが舟からあがられるとすぐに、けがれた靈につかれた人が墓場から出てきて、イエスに出会った。3 この人は墓場をすみかとしており、もはやだれも、鎖でさえも彼をつなぎとめて置けなかった。4 彼はたびたび足かせや鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり、足かせを碎くので、だれも彼を抑えつけることができなかつたからである。5 そして、夜昼たえまなく墓場や山で叫びつづけて、石で自分のからだを傷つけていた。6 ところが、この人がイエスを遠くから見て、走り寄って押し、7 大声で叫んで言った、「いと高き神の子イエスよ、あなたはわたしとなんの係わりがあるのです。神に誓ってお願ひします。どうぞ、わたしを苦しめないでください」。8 それは、イエスが、「けがれた靈よ、この人から出て行け」と言われたからである。9 また彼に、「なんという名前か」と尋ねられると、「レギオンと言います。大せいなのですから」と答えた。10 そして、自分たちをこの土地から追い出さないようにと、しきりに願いつづけた。11 さて、その山の中腹に、豚の大群が飼つてあった。12 精はイエスに願つて言った、「わたしどもを、豚にはいらせてください。その中へ送ってください」。13 イエスがお許しになったので、けがれた靈どもは出て行って、豚の中へはいり込んだ。すると、その群れは二千匹ばかりであったが、がけから海へなだれを打つて駆け下り、海の中でおぼれ死んでしまつた。14 豚を飼う者たちが逃げ出して、町や村にふれまわつたので、人々は何事が起つたのかと見にきた。15 そして、イエスのところにきて、惡靈につかれた人が着物を着て、正気になってすわつており、それがレギオンを宿していた者であるのを見て、恐れた。16 また、それを見た人たちは、惡靈につかれた人の身に起つた事と豚のこととを、彼らに話して聞かせた。17 そこで、人々はイエスに、この地方から出て行つていただきたいと、頼みはじめた。18 イエスが舟に乗ろうとされると、惡靈につかれていた人がお供をしたいと願い出た。19 しかし、イエスはお許しにならないで、彼に言われた、「あなたの家族のもとに帰つて、主がどんなに大きなことをしてくださつたか、またどんなにあわれんでくださつたか、それを知らせなさい」。20 そこで、彼は立ち去り、そして自分にイエスがしてくださつたことを、ことごとくデカポリスの地方に言いひろめ出したので、人々はみな驚き怪しんだ。

21 イエスがまた舟で向こう岸へ渡られると、大せいの群衆がみもとに集まつた。イエスは海べにおられた。

■プロフィール：鈴木寛（国際基督教大学名誉教授） 大学では、数学やデータサイエンスを教え、困難を抱えた学生の支援や、サービス・ラーニングなどの責任をもち、聖書の会を学内住宅で毎週開いていました。2019年3月に65歳で定年退職、児童養護施設のぞみの家、障害者就労支援施設日本キリスト教奉仕団、新潟の、敬和学園で、理事をしています。

（個人HP：<https://icu-hsuzuki.github.io/science/index-j.html>）

# Contents

1	はじめに	7
2	自己紹介	7
2.1	自己紹介：高校生時代	7
2.2	東南アジア53日間貨物船の旅	9
2.3	その後の共に生きる歩み	10
3	聖書の理解	12
3.1	突風を鎮める	12
3.2	平和とは（1）	16
3.3	悪霊に取り憑かれた人を癒やす	17
3.4	平和とは（2）	21
4	まとめ	21
4.1	イエスと弟子たち	21
4.2	最後に	25

# 1 はじめに

[no.9]

みなさんは、クリスマスと言うとどんなことを思い出しますか。わたしは、子供の頃、教会学校のクリスマスの劇で、

「いと高きところでは、神に栄光があるように、／地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」。  
ルカ2:14（口語訳）<sup>\*1</sup>

と言う天使役となったのですが、何歳かはよく覚えていませんが、自分にとっては、この聖句を覚えるのがとても大変で、間違えずに言えるかとても、不安だったことを思い出します。

野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた羊飼いたちに、主メシアの誕生が告げられたときの讃美のことばが、この「神に栄光、地に平和」だとルカによる福音書に書かれています。

「平和」と言われていますが、平和とは、どのようなものでしょうか。

よくわからないときは、その反対のことば、対義語を考えるのも一つです。「戦争」は「平和」の反対でしょうか。戦争のときは、平和ではないよう思います。では、戦争がないときは、平和でしょうか。そのように考えるひともいるかも知れません。しかし、なにか、不十分なようにも、感じます。

みなさんにとって、平和とは、どのようなものですか。

(1:20)

## 2 自己紹介

### 2.1 自己紹介：高校生時代

[no.10]

わたしは、ほとんど皆さんことを知りませんが、おそらく、みなさんも、わたしのことをほとんど知らないと思います。しかし、わたしがどう考えるか、どう感じるかには、わたしがどのような道を歩いてきたかが反映しますから、これからのお話しについて、理解していただけになることを願って、自己紹介をさせていただきます。

1969年、わたしが、高校一年生の秋、<sup>\*2</sup> 学園紛争が起きました。一部の生徒が他校の生徒と一緒に校長室付近をバリケード封鎖、それから、毎日、政治的な問題などの議論が続き、警察機動隊も入り、数ヶ月間、授業はありませんでした。警察機動隊が、バリケード封鎖を解除したときの様子は知りませんが、それ以外では、とくに暴力のようなものはありませんでしたが、少なくとも平和とは言えない状況でした。

たくさんの議論をしました。自分で問うたり、友達に問われたりして、この頃から考えようになつた問い合わせあります。

<sup>\*1</sup> 新共同訳「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ。」聖書協会共同訳  
「いと高き所には栄光、神にあれ／地には平和、御心に適う人にあれ。」

<sup>\*2</sup> 1969年10月13日（月曜日）

- A. 理不尽だと思われることを訴えるために法を犯す決断をする条件は？
- B. わたしがイスラム教の家庭や共産党員の家庭に生まれていたら？

1つ目は、社会に理不尽だと思われることがあったときに、バリケード封鎖までして、授業を妨害すべきだとする根拠や条件は何なのかという問いただす。これは、戦争や戦争を始めることにも関係した問い合わせもあります。ロシアやウクライナ、イスラエルやパレスチナのひとたち、ハマスや、ミャンマーの人たちはどうしたら良いのかという問い合わせにもつながると思います。

2つ目。わたしは、クリスチャンホームで育ち、その価値観がたいせつだと教えられ、信じて育ってきたけれど、普遍性はあるのだろうか。なかなか合意が得られないときに、共有すべき価値観を探し、平和を求め、協力して生きていくには、どうしていったら良いかという問い合わせです。

少し前に、わたしの一つ歳上のロシアの大統領のウラジーミル・プーチンについて[2]の本を読み、最近、わたしの一つ歳下で、ドイツの首相を16年間務めたアンゲラ・メルケルの自伝[3]を読みました。今は、アメリカ同時多発テロ事件などを主導したとされる、三・四歳下のウサマ・ビン・ラーディンについて学んでいます[4]。わたしと同じ歳の中国の国家主席の習近平についても、いずれ、学んでみたいと思っています。歳が近いと、同じ時代を生きているのでイメージしやすいと感じているからです。

[no.11]

学園紛争で、生徒たちの中にも、分断が広がっていく中、わたしは、教会に熱心に通うようになりました。大学生が多く、その人たちの話を聞き、一緒に行動し、ちょっと背伸びをしているような感じがあり、急に世界が広がった時でした。

その教会の牧師<sup>\*3</sup>は、戦争のころ、宣教師として東南アジアに行っておられ、戦後すぐ「つぐないのわざ<sup>\*4</sup>」として、東南アジア学生寮を作り、アジアの戦争孤児や、日本軍の兵隊と、現地の女性との間に生まれたこどもを、日本に留学や職業研修のために招いていました<sup>\*5</sup>。

日本の若者が、学園紛争など混迷の中でエネルギーを使い果たすのではなく、次の時代のために東南アジアをじかに見、アジアの人々と直接交流する機会を持ってほしい。

と折に触れて言っておられたこともあり、青年会のメンバーで、東南アジアに、行くことにしました。先生とも親しい海運会社<sup>\*6</sup>が、貨物船の空いている船室にユースホステルと同等の料金で青年を乗せてアジアを回るツアーを企画しており、そこに、大学生六人とわたしの合計七人で参加することにしたのです。

旅行が計画されてから1年近く、皿洗いや、旅館の手伝い、中小企業での部品の組み立て、タイプライターのセールスなどのアルバイトをして、お金をためました<sup>\*7</sup>。振り返

<sup>\*3</sup> 日本基督教団東京池袋教会、加藤亮一牧師。牧師夫人の朝子さんは、父の親戚でもあり、両親がその教会に出席していた。

<sup>\*4</sup> 参考：「今は、つぐないの時」[1]

<sup>\*5</sup> 父親探しや、多くの無国籍のこどもたちの国籍取得など、困難な問題にも取り組んでいた

<sup>\*6</sup> 小山海運：東南アジア航路を中心に、1960年代から成長、1975年8月21日破産

<sup>\*7</sup> 海運会社に払い込んだお金は72,000円。初任給は、35,000円程度の時代。高校生のアルバイトの時給

ってみると、アルバイトでは、大変な経験もしましたが、さまざまなことを学ぶことができたと思います。

(5:55)

## 2.2 東南アジア53日間貨物船の旅

[no.12]

1970年高校二年の夏、貨物船の旅に出ることになりました。

スライドの写真は、出発のときに、見送りの人と共に、横浜の本牧埠頭で撮った写真です。後ろの列の中央に私が写っています。牧師夫人、お嬢さんお二人、寮母さんのお孫さん、シンガポールからの研修生が写っています。この方は日本軍による、シンガポール華僑虐殺事件の遺児、犠牲者の息子さんです。

[no.13]

日本から中古のブルドーザーや工作機械を積んでシンガポール (Singapore) やマレーシアのペナン (Penang) という自由貿易港でおろし、インドネシアのボルネオ島<sup>\*8</sup> のバリクパパン (Balikpapan) とサマリンダ (Samarinda) に寄り、ラワンという材木を積んで、韓国の釜山でおろすという53日間の旅でした<sup>\*9</sup>。

旅行の準備の期間も、旅行中も、聖書や英語やアジアについての勉強会をしました。西洋の植民地からアジアの人々を解放するという名目で、アジアに進出し、労働力や資源を日本の植民地のように使い、戦争のために略奪し、虐殺も含め、日本軍が武力で現地の人たちを支配していった歴史を学び、日本人としての戦争責任の重さを感じ、アジアの人たちとどのように向き合えば良いのか正直不安になっていきました<sup>\*10</sup>。

[no.14]

訪問先では、教会を訪ね、また、さまざまな人たちと会いました。ある程度年配の方の多くは、日本人が嫌いで、憎しみを持っていたり、日本の経済的な発展を、妬ましく思っていました<sup>\*11</sup>。皆、非常に貧しい生活をしていて、さまざまな方法でお金を稼ごうとしている子供達<sup>\*12</sup> や、性的なサービスをしないと生きていけない若い女性たちとも出会い

---

は、100円から180円程度。教会では、週報やその他文タイプを使う仕事をわたしのアルバイトしてくれたり、バザーをして援助してくれた。両親は心配していたが、最後には、応援もしてくれた。父は当時は国家公務員（労働省）、軽い身体障害があり、兵隊には取られず、軍属（軍人以外で軍に所属し、文官、雇員、傭人などとして勤務する者）としてインドネシアに労働調査のために行っており、牧師ともインドネシアでも会っていたが、戦争中の経験から、自分は東南アジアには行けないと言っていた。

\*8 インドネシアでは現在はカリマンタン島と呼ぶ

\*9 横浜の本牧埠頭を出て、次は神戸三宮港、(ここで大阪万博 Expo 70 に行き、次の、) 平島宇品港 (からは、平和記念公園に行き) と短期間停泊し、それから、シンガポールへ。シンガポールには、メンバーが関係していた、キリスト教団体、国際 Navigators の支部があり、ペナンには、東南アジア学生寮に来ていた留学生が帰国していたので、お世話になったが、バリクパパン (製油場があった) や、サマリンダ (現在はカリマンタン州の州都だが、そのころは、河をのぼって行ったところにある小さな港町) には、まったく知人がいなかったので、教会を探した。材木の上げ地が釜山に決まったのは、サマリンダを出発するころ。

\*10 牧師から話も聞いていたので、一般的日本人よりは知識があったが、日本のアジアにおける戦争犯罪などは、まだ、情報が限られており、どうも、たいへんなことをしていたらしいといった曖昧な情報も多かったと思う。

\*11 東南アジアでもある程度そうだったたが、特に当時、韓国では、ほとんどすべてのひとが日本を嫌正在るよう見えた。

\*12 サマリンダで、作業を手伝うお父さんと一緒に船に来た男の子が、わたしのサンダルを欲しいという。お前は、他にも靴を持っているだろう、自分は裸足だという。かなり迷って、そのサンダルをあげようとすると、底が少しあがれているのをみつけ、これは売れないからいいらしいという。会話は無論、ほとんど身

ました \*13。しかし、必死に生きている姿を見て、わたしは、その人たちに日本人のことについて謝って回るより、「同じ時を、ともに生きるものとして、責任をもって生きていくことが、たいせつなのではないか」と思うようになりました。あまり良い表現ではないかもしませんが、「違った世界で生きていても、この人たちのことを覚え、この人たちに恥ずかしくない生き方をして、生きていこう」と決断させられたということでしょうか \*14。

この考えは、学園紛争による分断で、違う側にいるようになってしまった、直前まで親しくしていた人と共に生きることを考えるなど、その後も、人生のさまざまな時に、自分が何をたいせつにするかの決断に、影響を与えてきました。むろん、反省もありますが。

(8:45)

貨物船での旅行は、いろいろな思い出もあります。何人か仲間が船酔いになって勉強会が続けられなくなったときは、わたしは、酔わなかったので、残りの大学生と麻雀ばかりしており、麻雀もそこそこ強くなりました。船を操る操舵室や機関室に入れてもらい、航海について教えてもらったり、ベトナム戦争中でしたので、アメリカの第七艦隊のたくさんの艦船と緊張のうちにすれ違ったり、天の川がわからないぐらいの満天の星、このとき初めて人工衛星も見ました。船を追いかけてくるイルカもたくさん見ました。飛魚が甲板に飛び込んできたので捕まえて、夕食に焼いてもらったり、材木がなかなか来ない時は、船員さんが救命用ボートを下ろしてくださり、ボートを漕いで行って、地元の漁師から魚を買ったり。すごい台風にもあい、船が木の葉のように揺れたり。韓国では、戒厳令が敷かれていて、さらに、コレラも流行っていて下関で検疫のために留め置かれたり。実は旅程も正確には決まっておらず、電信 \*15 で情報を得て、材木の上げ地が韓国になったことを知ったのは、かなり後になってからでしたし、横浜に船が戻り、家に帰ってきたのは、二学期が始まって二週間以上経った時でした \*16。

[no.13]

(10:13)

## 2.3 その後の共に生きる歩み

[no.15]

高校卒業後、わたしは大学で数学を学び、大学院の途中からアメリカに約三年間留学、地方国立大学に就職が決まり、数学の研究に集中する楽しさも経験していた頃、ICUと呼

---

振り手振り。

\*13 桟橋に停泊するのは停泊料金が発生するため貨物の積み下ろしの時だけ、基本的に、湾内に停泊。上陸ははしけ（河川や港湾で、大型船と陸の間を往復して貨物を運ぶ、平底の小型船。barge, lighter）を利用。すると夜になると、はしけでいろいろなものを売りに来たり、コールガールや、コールガールを連れた人が来て、マッサージと称し、性的サービスの斡旋をする。かなり若い子もいた。英語がほとんど話せない、わたしと同室の人は、リーダーの部屋に行けと追い返すのがやっとだった。何をする人なのかも、あとから、説明を受けないとわからない高校生だった。

\*14 語学力もなく、直接コミュニケーションをとることが限定的であったことも、このように考えた背景にあると思う。教会に併設されていた、東南アジア学生寮の学生たちもいたので、努力して、もっともっと直接的な交流でできたと思うが、そのころは、できずにた。幼かったとも言えると思う。「今は、つぐないの時」[1] を読み返すと、かなりの割合の留学生は知っているが、深い交流はなかった。

\*15 電報はやりとりできたが、一文字単位の課金だったので、こちらから「ハイキ」、教会から「ハイキナラハイキ」ととても短い電文のやりとりをしていた。

\*16 関門海峡付近で、三日間足止め、大学生たちは、期末試験が受けられないと卒業ができないと心配していた。

ばれることが多い、国際基督教大学という、キリスト教主義のリベラル・アーツ大学に、異動することになりました。

ICUに移る少し前から、アジアの大学<sup>\*17</sup> の数学研究の支援を始めていましたが、ICUに移ってからは、数学の研究・教育だけでなく、さまざまな困難を抱えた学生の学修を支援する、学生学修支援、障害者の支援、タイの山地族の村でのワークキャンプ、サービス・ラーニングというプログラムで、国内だけではなく、中国、韓国、フィリピン、インドネシア、タイ、インド、ケニアなどでの活動を企画し、学生を送り、同行して一緒に学ぶこともしてきました。

学内住宅の我が家で、木曜日の夜に、誰でも歓迎することをたいせつに、ディスカッション・スタイルの聖書の会を開き、退職まで16年ほど続けました。人数が少ない時もありましたが、妻がお茶やケーキを準備してくれたからでしょうか、最後は、毎週20人から30人集まる会になっていました。5年ぐらい経った頃でしょうか、独立学園出身者が出席してくださるようになり、それ以降は殆ど全員、聖書の会の中心メンバーとなっていました。中島（磯）怜美先生もそのお一人です。何を言っても良い、他のひとの話を聞いているだけでも良い、黙ってケーキを食べお茶を飲んで、おしゃべりをするのもよい、居心地の良い場だと思ってくださった方がたくさんおられたのかなと思います。<sup>\*18</sup>

学びの場であるとともに、仲間との心地良い居場所だったのかもしれません。ひとが学び、成長していくには、「居場所」と言えるものが、重要な気がします。わたしにとっては、教会や、青年会の仲間との時が、成長することができた「居場所」だったように思います。その「居場所」の一つを、我が家が提供できていたのかもしれません。基督教独立学園の皆さんにとっては、ここ、学園が「居場所」になっているのかなと羨ましく思います。「居場所」は、それぞれ離れていても、育った場所として、一生たいせつなものであり続けるように思います。

わたしが大学3年生のころ、児童養護施設<sup>\*19</sup> で働かないかと、声をかけてくださった園長さんがおられたのですが、その方は、わたしがアメリカに留学してすぐ、癌でなくなられました。児童養護施設は、奥様が引き継いでおられ、ICUから近かったこともあり、理事として、関わるようになりました。

これは、退職してからですが、コロナで、小中学校がお休みになったときに、頼まれて、こどもたちの学習時間に、毎日、学習支援に行きはじめ、そのあとも勉強が遅れているこどもを見ていた時期もあります。コロナのときは、職員さんも非常に大変だったので、お手伝いで、宿直ボランティアもするようになり、それは、回数は減りましたが、今も続いています。

また、現在は、障がい者の就労支援施設<sup>\*20</sup> のお手伝いもしています。

わたしは、ずっと大学で教えてきたわけですが、聖書の会や、児童養護施設や、障害者

<sup>\*17</sup> 中心は、フィリピンと中国。フィリピンとの間には、日本学術振興会が支援するプログラムも存在していました。

<sup>\*18</sup> ホームページに <https://icu-hsuzuki.github.io/biblestudy/> 記録がある。メールでの聖書通読の会も2011年から続いている。 <https://icu-hsuzuki.github.io/science/bible/brc.html>

<sup>\*19</sup> 児童福祉施設のぞみの家 <https://www.nozomino-ie.or.jp>

<sup>\*20</sup> 日本キリスト教奉仕団 <https://jcws.or.jp/houjin/houjintop.html>

就労支援施設、そして、サービス・ラーニングなどで、伺う国内外の施設では、わたしとは、まったく異なった歩みをしておられる方とたくさん出会うことができました。他者にとってたいせつなことは、なかなか分かりません。しかし、そう簡単には、わからないけれどたいせつなことがあること、そして、優劣ではなく、その一人一人の人生がたいせつであることを、それぞれの場で学ばされてきました。そして、その出会いがわたしにとつての「宝物」になっているのだと思います。ここ、基督教独立学園でも、今回は三日間の滞在ですが、みなさんと、そのような出会いが、できればと願っています。

(14:55)

### 3 聖書の理解

#### 3.1 突風を鎮める

[no.16]

今回の聖書の箇所を、少しずつ見ていきましょう。まずは、前半、イエス様が嵐を鎮められたという記事です。すでに、読んだことがある方もおられるかも知れませんが、読まれたことが無い方も含めて、能動的に読むには、問い合わせをもつと良いと思うので、以下のことを考えながら読んでみましょう。

1. どのような時に起こったことでしょうか。
2. どのような人がその場にいるでしょうか。
3. 舟については、どのようなことがわかりますか。
4. 嵐の状況はどのように描かれていますか。
5. 弟子たちはどのように反応していますか。
6. イエスについてはどのように描かれていますか。
7. 結果については、どのように書かれていますか。

ほんとうは、みなさんに考えていただき、答えていただくのがよいのですが、今日は、講演ということですから、わたしが書かれていることから答えていきましょう。もちろん、それが正解というわけではなく、ほかにもいろいろな取り方があると思います。

■1. いつ? 背景? 最初から見ていきましょう。「4:35 その日の夕方になって、イエスは、『向こう岸に渡ろう』と弟子たちに言わされた。36 そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。」<sup>\*21</sup> とあります。

[no.17,18]

すでに、夕方になっていたようです。ガリラヤ湖という湖のほとりにいますが、この記事の直後5章1節に「5:1 一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。」とあります。ガリラヤ湖は、東西13km、南北21km、周囲53km の湖です。このときどこにいたか明確には書かれていませんが、おそらく、カファルナウム付近と思われます。今は、米坂線では小国まで来れないようですが、学園から小国は、11km ぐらいですが、地図を見

\*21 聖書協会共同訳 4:35 さて、その日の夕方になると、イエスは弟子たちに、「向こう岸へ渡ろう」と言われた。36 そこで、彼らは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。口語訳 4:35 さてその日、夕方になると、イエスは弟子たちに、「向こう岸へ渡ろう」と言われた。36 そこで、彼らは群衆をあとに残し、イエスが舟に乗っておられるまま、乗り出した。ほかの舟も一緒に行つた。

る限り<sup>\*22</sup>、おそらく、それぐらいの距離、舟を漕いで移動したのかなと思います。

[no.16b]

■2. 誰? これは、弟子たちがイエスと一緒に居たとしか書かれていませんが、少し前の4章10節には、「イエスがひとりになられたとき、十二人と、イエスの周りにいた人たちとが、たとえについて尋ねた。」<sup>\*23</sup>とありますから、十二人以外の弟子もいたのかも知れません。また、対応するルカ8章1-3節<sup>\*24</sup>を見ると、一緒に女性たちがいたことも書かれています<sup>\*25</sup>から、十二弟子以外にも、女性たちもふくめ、何人もの人が一緒に舟にいた可能性があります。

■3. 舟は? 「ほかの舟も一緒であった。」(4:36b)<sup>\*26</sup> この「ほかの舟」<sup>\*27</sup>は原語のギリシャ語、または英語では複数ですから、三艘以上、はっきりはわかりませんが、三・四艘ぐらいだったでしょうか。十二弟子には、ペトロとアンデレ<sup>\*28</sup>、ヤコブとヨハネという漁師の兄弟が含まれており、ヤコブとヨハネの父ゼベダイの家は雇い人もいる網元のような家だったことが書かれています<sup>\*29</sup>から、彼らの舟だった可能性が高いように思います。ある程度の人数が何艘に分かれて乗っていたのでしょう。網を使って魚を取っていたようですし、ガリラヤ湖に今もいる、St Peter's Fish と呼ばれる魚は、長さ40cm 重さ1.5kg とも言われていますから、もし、これを網で取るとすると、ある程度の大きさの舟だったと思われます。発掘調査によると、長さ8.2m 幅 2.3m ぐらいの舟が一般的だったようです。両手をいっぱいに広げた長さと身長は、ほぼ同じだと言われています。女子高校生の身長の平均は、160cm 弱だから、女子高校生が五人両手をいっぱいに広

\*22 Galilee in the Time of Jesus, The Ministry of Jesus around the Sea of Galilee

\*23 聖書協会共同訳：イエスがひとりになられたとき、イエスの周りにいた人たちが、十二人と共に、たとえについて尋ねた。口語訳：イエスがひとりになられた時、そばにいた者たちが、十二弟子と共に、これらの譬について尋ねた。

\*24 新共同訳：1 すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。2 悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。

\*25 他にも、イエスの十字架のそばにいた女性たちが描かれていることからも、最後にある程度の長い旅をしてガリラヤからエルサレムに上ったときにも、一緒にある程度たくさんの女性がいたことがわかります。例：マルコ15:40,41, ヨハネ19:25-27, マタイ27:55,56, ルカ23:49等

\*26 聖書協会共同訳：ほかの舟も一緒であった。口語：ほかの舟も一緒に行った。

\*27 36 そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。NIV 36 Leaving the crowd behind, they took him along, just as he was, in the boat. There were also other boats with him. 36 καὶ ἀφέντες τὸν ὄχλον παραλαμβάνουσιν αὐτὸν ὡς ἦν ἐν τῷ πλοίῳ, καὶ ἀλλα πλοῖα ἦν μετ' αὐτοῦ.

\*28 アンデレは、バプテスマのヨハネの弟子だったので、家からは離れており、漁師はしていなかった時期もあったかも知れない。ヨハネ1:40 ヨハネの言葉を聞いて、イエスに従った二人のうちの一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった。

\*29 16 イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。17 イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。18 二人はすぐに網を捨てて従った。19 また、少し進んで、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、20 すぐに彼らをお呼びになった。この二人も父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った。

げてつながったぐらいの長さです。あとで実験してみると良いかもしれません。 \*30\*31

\*32 \*33 よく、池にある手漕ぎボートと比較すると、かなり大きいものだと考えてよいと思います。

■4. 嵐の状況は? 「37 激しい突風が起り、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。」 \*34 とあります。実は、ガリラヤ湖は、海平面より200mぐらい下の谷にあり、丘や山に囲まれていて、そこから強い風が吹き下ろすこともあるそうです。 \*35

■5. 弟子たちは? 「弟子たちはイエスを起こして、『先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか』と言った。 \*36」 (38) とあります。この弟子たちが、誰かはわかりませんが、わたしは、漁師以外の弟子たちだと思います。女性や、このような突風になれない人たちにとっては、舟が水浸しになったら、それは恐怖です。出発したのはすでに夕方でしたから、もし夜になっていたら、とても怖かったと思います。夜の海、大きな湖は怖いですよ。

[no.19]

しかし、実際には、水が入ってきても、舟はなかなか沈まないようにできています。

\*37 漁師たちは、必死で、舟を操っていたと思います。わたしも、貨物船での旅で、台風にあいました。これは、145m、9500トンの舟ですから、彼らの舟と比較するととてもなく大きな船ですが、台風のときは、pitching and rolling と言って、縦揺れの pitching と横揺れの rolling で、舳先（へさき）は完全に水に埋まり見えなくなり、次の瞬間、ガ一と戻ってきます。操舵室から見ていましたが、復元力はあまりに凄いので驚きました。横揺れも、階段が横向きについていましたが、垂直ぐらいになりますから、揺れて逆に平らになったときに、いそいで移動というような感じでした。その中でも、三角波と言われ

\*30 実際考古学の発掘によっても、イエスの時代のガリラヤ湖の漁師の舟は、「ゲネサレトの舟」(ガリラヤの舟、マグダラのマリアの舟、ペテロの舟とも呼ばれる)として知られ、約8.2m (27フィート) の長さ、約2.3m (7.5フィート) の幅で、5~10人程度が乗り込める中型~小型の木造船でした。当時の漁業で使われた一般的なタイプで、イエスが弟子たちと漁をした際にも使われた舟のサイズとされています。

\*31 <https://www.magisterium.com/>: 考古学的証拠から推定すると、1986年にガリラヤ湖畔で発見された「ガリラヤの舟」(Galilee Boat) は、イエス時代のもので、長さ約8メートル、幅約2.3メートル、深さ約1.1メートル、積載量約4-5トン (15人程度乗船可能) とされています。この舟はオリーブ材とオーク材で作られ、帆と櫂を使用する典型的な漁船で、4-6人の漁師が操船し、夜通し網を引くのに適していました。

\*32 高校生の平均身長は、文部科学省の調査 (2024年度) によると、男子が168.6cm~170.8cm、女子が157.1cm~158.0cmの範囲で推移しており、学年が上がるにつれて男子は伸び続け、女子は16歳前後で伸びが緩やかになる傾向があります。 <https://shingakunet.com/journal/column/20160417130000/>

\*33 わたしが乗った、救命用ボートは二十人乗れると言っていました。それをオールで漕ぎましたが、大きさは同じぐらいなように思います。

\*34 聖書協会共同訳 37 激しい突風が起り、波が舟の中まで入り込み、舟は水浸しになった。口語訳 37 すると、激しい突風が起り、波が舟の中に打ち込んで、舟に満ちそうになった。

\*35 Gemini: ガリラヤ湖は海拔マイナス200m前後 (約-213m) と非常に低く、イスラエル北部に位置し、夏は暑く乾燥し、冬は温暖で過ごしやすい地中海性気候ですが、標高の低い湖畔は夏に高温多湿になり熱中症注意、一方で北部の高地 (ゴラン高原など) から冷たい風が吹くため、気候が急変し嵐になることがあるのが特徴です。

\*36 聖書協会共同訳 そこで、弟子たちはイエスを起こして、『先生、私たちが溺れ死んでも、かまわないのでですか』と言った。口語訳 そこで、弟子たちはイエスをおこして、「先生、わたしどもがおぼれ死んでも、おかまいにならないのですか」と言った。

\*37 おそらく、陸地に近いところを進むことが多い。

るものは危ないので、船長さんや航海士<sup>\*38</sup>は、何人もで、方々に目を配って、船を操っていました。彼らの舟も、水がいっぱいになっても、そう簡単には、沈まなかつたはずです。でも、必死さは伝わってきます。

[no.16b]

■6. イエスは? 「38 しかし、イエスは艤（とも）の方で枕をして眠っておられた。39 イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、『黙れ。静まれ』と言われた。すると、風はやみ、すっかり嵐になった。40 イエスは言われた。『なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。』<sup>\*39</sup>」とあります。艤（とも）というのは、舟の後ろの方で、そこは安定しています。それでもこの状態で眠っておられるというのは、かなり疲れておられたのかも知れません。おそらく、舵を握っているような、舟を操っている一人は、その近くにいたのではないかと思います。実際に、どのように、突風が収まったのかはわかりませんが、嵐になった。水面が平になったとあります。イエスは、「なぜ怖がるのか。まだ信仰がないのか。」と言っておられます。イエスは、怖くはなかった。弟子たちも「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないですか」と言っていますから、「先生は大丈夫かもしれません」と思っていた印象も受けます。弟子たちは、なぜ、怖かったのでしょうか。みなさんは、どんなことが怖いですか。私は、何が起こるかわらかない、未知のものに対する恐怖かなと思います。その最たるもののが、死でしょうか、ここでは、溺れることだったのでしょうか。イエスは、風を叱る必要はなかったはずです。叱ったのは、弟子たちのためなのでしょう。「まだ」と言っていますから、イエスと一緒にいたら、なにか、たいせつなことを、学んでいることがあるはずだと言っているように見えます。それは、不信仰にならず、怖がらず、信頼できるはずだと言っているのでしょうか。そのような正しさをもって厳しく言っておられるのでしょうか。

■7. 結果は? 最後には、「41 弟子たちは非常に恐れて、『いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか』と互いに言った。<sup>\*40</sup>」とあります。イエスの認識を改めたときだと書かれています。

■疑問 いくつか疑問が湧きます。なぜ、イエスは、怖がらなかつたのか。イエスが信仰と言っているものはどのようなものなのだろうか。弟子たちは、なぜ、『一体この方はどなたなのだろう。風も湖さえも従うではないか』とこのように表現したのだろうかということです。

最初の問いは置いておいて、あの問いは、わたしは、漁師たちのことばだったのでは

\*38 わたしが乗った船には、船長以外に、一等航海士、二等航海士、三等航海士がいました。台風のときは、三人ぐらいが操舵室に集まっていたと思います

\*39 聖書協会共同訳 38 しかし、イエス自身は、艤の方で枕をして眠っておられた。39 イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり嵐になった。40 イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信仰がないのか。」口語訳 38 ところが、イエス自身は、艤の方でまくらをして、眠っておられた。口語訳 39 イエスは起きあがって風をしかり、海にむかって、「静まれ、黙れ」と言われると、風はやんで、大なぎになった。40 イエスは彼らに言われた、「なぜ、そんなにこわがるのか。どうして信仰がないのか。」

\*40 聖書協会共同訳 41 弟子たちは非常に恐れて、『一体この方はどなたなのだろう。風も湖さえも従うではないか』と互いに言った。口語訳 41 彼らは恐れおののいて、互に言った、『いったい、この方はだれだろう。風も海も従わせるとは』。

ないかと思います。ガリラヤ湖を仕事場としていた漁師は、このような嵐には何度も出会っていたでしょう。こんなことで怖がる必要はないとも思って、しかし、必死で、漁師の力を見せてやるぐらいの感じで、舟を操っていたのではないかと思います。怖がっていたひとたちは、ああ良かった。溺れないで良かったぐらいの気持ちのほうが、強かったと思いますが、漁師たちにとっては、「風や湖さえも従う」は、驚くべきことだったでしょう。

わたしは、マルコによる福音書は、11章でエルサレムに入られるまでの部分は、ペトロなどが語っていたことがまとめられていたのではないかと考えています。ここでも「ほかの舟も一緒であった。」とあまり本筋に関係ないことも書かれており、他の箇所にも、舟のことがよく出てきますし、長い説教は出てきません。行動の記録が中心になっています。そう考えると、ここでも、ペトロたちがどう考えたかが、『いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか』ということばで表現されているのではないかと思います。

さて、その上で、なぜ、イエスは怖がらなかったのか。ギリシャ語の「信仰」は、「信頼」や「忠実」とも同じ言葉ですが、ここで言われている「信仰」とはどのようなものなのでしょうか。

(25:46)

### 3.2 平和とは（1）

[no.20]

さて、最初に「平和とは」という問い合わせかけました。嵐の中では、弟子たちは、平和ではない状態だったでしょう。それが突然、平和な状態が訪れた。何によって変わったのでしょうか。イエスの一声だとも言えると思います。しかし、イエスは、元々、怖がらなくて良かった、信仰を持っていればと言っているようですから、もしかすると、最初から、この舟は、平和の中にいたのかも知れません。どう思われますか。

最初に、ルカのイエスの誕生に関する箇所を引用しましたが、イエスの誕生については、マタイによる福音書にも書かれています。そこには、ヨセフに次のようなことばが告げられたとあります。

1:22 このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言っていたことが実現するためであった。23 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。  
(マタイ 1:22,23 新共同訳) \*41

イエスがおられるということは「神が我々と共におられること」だと言われているようです。これは、どのような意味なのでしょうか。イエスと一緒にいれば安全だよというこ

\*41 聖書協会共同訳 1:22 このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言わたったことが実現するためであった。23 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。／その名はインマヌエルと呼ばれる。」これは、「神は私たちと共におられる」という意味である。口語訳 1:22 すべてこれらのことが起ったのは、主が預言者によって言わたしたことの成就するためである。すなわち、23「見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」。これは、「神われらと共にいます」という意味である。

### 3.3 悪霊に取り憑かれた人を癒やす

[no.21]

では、後半をみてみましょう。また、問い合わせてみます。

1. どのような時、背景において起こったことでしょうか。
2. どのような人がその場にいるでしょうか。
3. 悪霊に取り憑かれた人についてどのように表現されていますか。
4. イエスとこのひととのことはどのように書かれていますか。
5. どうなりますか。
6. 豚飼いや町や村の人々はどうしますか。
7. 悪霊に取り憑かれた人についてはどのようなことが書かれていますか。

■1. いつ？背景？ 5章1節「5:1 一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。2 イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた靈に取りつかれた人が墓場からやって來た。<sup>\*42</sup>」とあります。これは、偶然のことなのでしょうか。最後、実は次の話の最初には、「21 イエスが舟で再び向こう岸に渡られると、大勢の群衆がそばに集まって來た。イエスは湖のほとりにおられた。<sup>\*43</sup>」とあります。もと居たところに戻ったようですね。ということは、この湖の向こう岸に行って、すぐもとの場所に戻ったわけですから、わたしは、このひとの噂を聞いて、イエス様は、弟子たちを連れて嵐にあいますが、わざわざこのひとに会いに行ったのではないかと思います。

■2. 誰？ ここには、誰がいると思いますか。まずは、汚れた靈につかれたひとがいますが、この人については、次に見ることにしましょう。後からは、豚飼いや、町や村の人々が登場しますが、すくなくとも、イエス様はおられ、おそらく、弟子たちもいます。不思議なのは、ここには、ある程度の数の、弟子たちが居たはずですが、彼ら・彼女らは、何も言いません。なぜでしょう。

ここには、豚飼いが登場し、町や村のひとたちも、話しています。ユダヤ人は、豚を汚れた動物としていましたから、この町や村のひとたちは、ユダヤ教徒ではない人たちだったのでしょう。

■3. 悪霊に取り憑かれた人？ さて、このひとについて、どのように聖書は記しているか見てみましょう。

2 イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた靈に取りつかれた人が墓場からやつ

<sup>\*42</sup> 聖書協会共同訳 5:1 一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。2 イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた靈に取りつかれた人が墓場から出て来て、イエスに会った。口語訳 5:1 一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。2 イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた靈に取りつかれた人が墓場から出て来て、イエスに会った。

<sup>\*43</sup> 聖書協会共同訳 21 イエスが舟で再び向こう岸に渡られると、大勢の群衆がそばに集まって來た。イエスは湖のほとりにおられた。口語訳 21 イエスがまた舟で向こう岸へ渡られると、大ぜいの群衆がみもとに集まってきた。イエスは海べにおられた。

て來た。3 この人は墓場を住まいとしており、もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかった。4 これまでにも度々足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は碎いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかつたのである。5 彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたいたいたりしていた。

\*44

「汚れた靈に取りつかれた」は、誰の判断かはわかりませんが、聖書記者はそう記し、イエスも「汚れた靈」と呼びかけたと書かれています。そして、墓場に住んでいます。かつ、足かせや鎖で何度も繋いだが、鎖を引きちぎり、足かせを碎くので、誰も彼を押さえつけることができなかつた。とあります。墓場に住んでいるというだけで、驚かされますが、町や村には、住まわせてもらえなかつたのでしょうか。このあとも、鎖や足枷のことが書かれていますが、すくなくとも自分でこれらをはめたわけではありませんから、誰かに繋ぎ止められ、拘束されたのでしょうか。昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたいたいたりしていた、とあり、異常行動とも言えますが、自傷行為もしていたとありますから、自分でも、どうしたら良いかわからない状態だったのかも知れません。

みなさんは、このひとをどのようにみますか。異常なことは、確かですが、どのようなことによって、このような状態になったかは、書かれていません。いつからなのか、生まれつきなのか。ただ、周囲の人にとっては、どこかに繋いでおきたい、すくなくとも、自分たちからは離れていて欲しいと思ったのでしょうか。

わたしは、大学で教えていたところから、精神疾患を患っておられる方、そして、精神的なことで苦しんでおられる方と何人も接してきました。少し前ですが、精神科の病院に入院されている方を見舞いに行くと、動けないように、拘束されている場合もありました。お年寄りも、いろいろな理由で、自由が奪われ、拘束されることもあり、また、拘束することがあるということに家族が同意しないと、入院できない場合もあります。病院は、それだけ、大変な場もあるのでしょうか。

ここは墓場だとあります。墓場では、少なくとも、継続的に、簡単に食べ物は得られないと思いますから、何らかの方法で、食べ物は得ていたのでしょうか。もしかすると、家族が、他の人には見つからないように、運んでいたのかも知れません。

「石で自分を打ちたいたいたりしていた」はどのように理解したら良いのかわかりませんが、もしかすると、自分の存在自体を消し去りたいと思うような時があったのかも知れません。

#### ■4. イエスとこのひと さて、このような人と、イエスは、どう向き合われるのでしょうか

\*44 聖書協会共同訳 2 イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた靈に取りつかれた人が墓場から出て来て、イエスに会った。3 この人は墓場を住みかとしており、もはや誰も、鎖を用いてさえつなぎ止めておくことはできなかつた。4 度々足枷や鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり足枷を碎くので、誰も彼を押さえつけることができなかつたのである。5 彼は夜も昼も墓場や山で叫び続け、石で自分の体を傷つけていた。口語訳 2 それから、イエスが舟からあがられるとすぐに、けがれた靈につかれた人が墓場から出てきて、イエスに出会つた。3 この人は墓場をすみかとしており、もはやだれも、鎖でさえも彼をつなぎとめて置けなかつた。4 彼はたびたび足かせや鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり、足かせを碎くので、だれも彼を押えつけることができなかつたからである。5 そして、夜昼たえまなく墓場や山で叫びつづけて、石で自分のからだを傷つけていた。

うか。次のように書かれています。

6 イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、7 大声で叫んだ。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」8 イエスが、「汚れた靈、この人から出て行け」と言わされたからである。 \*45

非常に短いですが、どうも、「汚れた靈、この人から出て行け」とイエスが言うと、それに対して、「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」と大声で叫んだ。とあります。イエスは、このひとつ、汚れた靈を区別して、汚れた靈に、命じられているようですが、答えてているのは、おそらく、汚れた靈なのでしょうが、苦しめないでほしいと言っていますから、このひとの中から出た言葉なのか、それとは、まったく独立な、汚れた靈という実体があるのかはわかりませんが、おそらく、苦しみが表現されているのでしょうか。

しかし、その次には、唐突に感じますが、イエス様は「名は何というのか\*46」とお尋ねになっています。「名はレギオン。大勢だから \*47」だと答えています。レギオンは、大勢という普通名詞でもありますが、ローマの兵隊の一大隊という意味にも使われ、その場合は、時代にもよるようですが、五・六千人ぐらいの部隊を意味していたようです。多重人格ということばもありますが、どれが自分なのか、自分と思われるようなものがたくさんで、区別もつけられない、混乱した状況だったのかも知れません。

私は、専門家ではありませんから、正確には言えませんが、この人は、自分の視点に混乱があり、客觀性をもって、自分や、他者をみることができない状態なのでしょう。ある事件を通して、パニックになってそうなる場合もあるようです。

ここで、イエスは、名前を聞いています。それは、自分について、または、他者がどう呼んでいるかを聞いているのでしょう。他のひとを傷つけるようなことについては、書かれてありませんが、自分を傷つけることは、書かれていました。いないほうがありがたい存在、迷惑な存在とみられていても、イエスは、あなたは誰ですか、あなたの名前はと聞いておられます。この問い合わせから、どのようなことが起こったかはわかりませんが、すくなくとも、他の人とは違う接し方をイエスがしたことは確かでしょう。

[no.22]

■5. 結果は？ 豚のことが書かれていて、これが印象的なので、そこに、引き寄せられてしまいますが、このひとについてはどう書かれていますか。15節には、

15 彼らはイエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正

\*45 聖書協会共同訳 6 イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、7 「いと高き神の子イエス、構わないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい」と大声で叫んだ。8 イエスが、「汚れた靈、この人から出て行け」と言わされたからである。8 イエスが、「名は何と言うのか」とお尋ねになると、「名はレギオン。我々は大勢だから」と答えた。口語訳 6 ところが、この人がイエスを遠くから見て、走り寄って押し、7 大声で叫んで言った、「いと高き神の子イエスよ、あなたはわたしとなんの係わりがあるのです。神に誓ってお願ひします。どうぞ、わたしを苦しめないでください」。8 それは、イエスが、「けがれた靈よ、この人から出て行け」と言わされたからである。

\*46 聖書協会共同訳「名は何と言うのか」口語訳「なんという名前か」

\*47 聖書協会共同訳「名はレギオン。我々は大勢だから」口語訳「レギオンと言います。大ぜいなのですから」

気になって座っているのを見て、恐ろしくなった。 \*48

とあります。なんと、服を着、正気になって座っていたのです。実際には、何が起こったのか、書かれてはいません。

## ■6. 土地の人々？ これに対して、

16 成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれた人の身に起こったことと豚のことを人々に語った。17 そこで、人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたいと言いました。 \*49

つまり、豚飼いや、町や村のひとたちは、このことを受け入れられず、かえってパニックになってしまっているように見えます。

## ■7. このひとは？ このひとについては、以下のように書かれています。

18 イエスが舟に乗られると、悪霊に取りつかれていた人が、一緒に行きたいと願った。19 イエスはそれを許さないで、こう言われた。「自分の家に帰りなさい。そして身内の人々に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。」20 その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。人々は皆驚いた。 \*50

■豚について 豚のことはどう考えたら良いのでしょうか。わたしも正直よくわかりません。豚は死んだようです。これはおそらく経済的には大きな損失で、それは、だれの責任によって起こったのか。汚れた靈か、イエスが止めることができたなら、イエスの責任か。ただ、書き方からすると、豚飼いは、雇い人で、この人たちが大きな損失を被ったのではないのかも知れません。

しかし、少なくとも、このことによって、汚れた靈がこのひとから出ていったことが、みなに示されたと思いますし、そして、このひともそのことを知ることができたのではな

\*48 聖書協会共同訳 15 そして、イエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしくなった。口語訳 15 そして、イエスのところにきて、悪霊につかれた人が着物を着て、正気になってすわっており、それがレギオンを宿していた者であるのを見て、恐れた。

\*49 聖書協会共同訳 16 成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれた人に起こったことや豚のことを人々に語って聞かせた。17 そこで、人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたいと願い始めた。口語訳 16 また、それを見た人たちは、悪霊につかれた人の身に起った事と豚のこととを、彼らに話して聞かせた。17 そこで、人々はイエスに、この地方から出て行っていただきたいと、頼みはじめた。

\*50 聖書協会共同訳 18 イエスが舟に乗ろうとされると、悪霊に取りつかれていた人が、お供をしたいと願った。19 しかし、イエスはそれを許さないで、こう言われた。「自分の家族のもとに帰って、主があなたにしてくださったこと、また、あなたを憐れんでくださったことを、ことごとく知らせなさい。」20 そこで、彼は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことを、ことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。人々は皆驚いた。口語訳 18 イエスが舟に乗ろうとされると、悪霊につかれていた人がお供をしたいと願い出た。19 しかし、イエスはお許しにならないで、彼に言われた、「あなたの家族のもとに帰って、主がどんなに大きなことをしてくださったか、またどんなにあわれんでくださったか、それを知らせなさい」。20 そこで、彼は立ち去り、そして自分にイエスがしてくださったことを、ことごとくデカポリスの地方に言いひろめ出したので、人々はみな驚き怪しじゃん。

### 3.4 平和とは (2)

[no.23]

今回、最初に嵐の話をして、「まだ信じないのか」ということばから、イエスと一緒に行動をともにしていると、信じることができるようになること、わかるようになることがあることが書かれていましたから、その次に書かれている、汚れた靈につかれたひとの話を読みました。ここでは、弟子たちは、ひとことも喋っていませんが、経緯から、一緒にいたはずです。もしかすると、ここにいて経験したようなことが、嵐の中での信仰にも関係しているのかもしれません。

この話で、平和とは何なのでしょうか。

この汚れた靈につかれているひとは、「昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた。」(5) ですから、平和はなかったでしょう。そして、この人は、イエスが来ると「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」(7) と叫んでいます。神は、そして神の子イエスは、自分を苦しめる存在だと思っていたようです。

では、町や村の人々や、豚を飼っているひとたちにとって、どうなのでしょうか。最初の状態は、このひとたちにとって、平和だったのかも知れません。汚れた靈につかれている人を、枷や鎖でつないでおけば、平和に暮らしていたかも知れません。しかし、イエスが来て、このひとから汚れた靈が追い出され、このひとが、服を着、正気になって座っているのを見ると恐ろしくなり、イエスに出ていって、もらいたいと願います。

平和とは、どのようなものなのでしょうか。最初に、戦争のない状態でしょうか。と聞きましたが、イエスがなにもしなければ、このひとたちは、平和だったのかも知れないのです。

この物語の最後をもう一度見てみましょう。「イエスが舟に乗られると、惡靈に取りつかれていた人が、一緒に行きたいと願った。」(18) とあります。しかし、「イエスはそれを許さないで、こう言われた。『自分の家に帰りなさい。そして身内の人には、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。』」(19) そして、「その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。」(20) とあります。つまり、まず、身内の人には「主が自分を憐れみ、自分にしてくださったことを知らせ」ることをし、そして、さらに、デカポリス、すなわち、町や村のひとたちを含め、さらに広い地域のひとたちに、語ったのでしょうか。

その結果は、「人々は皆驚いた」とだけ書かれています、それ以上は、書かれていません。どうなったのでしょうか。

(40:03)

## 4 まとめ

### 4.1 イエスと弟子たち

[no.24]

イエスは、2000年ほどまえに生まれ、私たちが知る限りでは、成人してから、三年ほ

ど、弟子たちとともに歩まれました。最初にお話ししたように、十二弟子だけではなく、女性も含めほかにも一緒に行動した人たちがいたようです。しかし、どうも、本を書いたりはしなかったようです。

たとえば、人殺しや、戦争はいけませんよとか、神様を信頼して信仰をもって生きなさい、というような「正しさ」であれば、それは、律法や預言者と呼ばれる旧約聖書のように、文書で残した方が正確に伝わりやすいように思います。しかし、それは、イエスはしなかったようです。

しかし、イエスと行動をともにしていると、イエスのことばが意味を持ってきて、伝わることがあったのではないかでしょうか。そこで、福音書記者も、イエスの教えだけでなく、イエスがどう行動したかを伝えています。

みなさんと、一緒に、特に福音書を丁寧に少しずつ通して読むのが良いのかと思いますが、それはできませんから、ある部分を読んでみました。

ここからは、少し、急足になりますが、鍵となると思われる、イエスのことばを、三ヶ所だけ取り上げてみます。

まずは、イエスの宣教の第一声です。 \*51

1:14 ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、

15 「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

マルコ1章14節・15節（聖書協会共同訳） \*52

[no.25]

第一声は、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」です。中心は「神の国は近づいた」というメッセージです。神の国は、神様の支配とも言い換えられると言われていますが、もう少し、簡単なことばでいうと、「神様の御心がなる世界がすぐそこにあるよ」ということのように思います。もし、そうであれば、ある人が、異常だということで、枷や鎖で繋がれ、生きていても仕方がないと自分で考えるような状態からの変化は、この「神様の御心がなる世界がすぐそこにあるよ」ということを示しているよう思います。

信仰とは、神様の御心がなることへの信頼。すなわち、「神の国は近づいた」というイエスのメッセージをうけとることかも知れません。

先程読んだ聖書の箇所で、一緒にいたはずの弟子たちはなにを学んだでしょうか。イエスは、激しい突風で、舟は波をかぶって、水浸しになるようなことを経験しても、神様に信頼しているようで、向かった先では、一人の人から、汚れた靈を追い出し、このひとには平和が与えられたようです。おそらく、イエス一行は、まさに、このことのために、ガリラヤ湖の向こう岸、異邦人の土地にまで行ったと考えてよいでしょう。

わたしは、平和ということばが適切かどうかは、わかりませんが、自分の存在を消し去りたいとさえ思っていたような汚れた靈につかれたひとに、とくべつなことが起こり、神

\*51 今回一緒に読んだマルコによる福音書には、イエスの生誕物語はついていません。

\*52 聖書協会共同訳：ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい」と言われた。口語訳：ヨハネが捕えられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた、「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」。

の国、神の御心がなる世界について、思い巡らす切っ掛けが与えられたのではないかと思  
います。みなさんは、どう思われますか。

[no.24b]

二つ目は、イエスが「第一の掟」または、戒め、もっともたいせつなこととして伝えて  
いる箇所です。

12:28 彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えにな  
ったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」29 イ  
エスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたした  
ちの神である主は、唯一の主である。30 心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽  
くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』31 第二の掟は、これで  
ある。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」 マ  
ルコ12章28節-31節（聖書協会共同訳） \*53

[no.25]

律法学者は、第一の戒めと聞いているのに、イエスは第一、第二と二つ答えてい  
る。 「神を愛し、隣人を愛せよ」二つと考えることもできますが、一つだと考  
えることもできるかもしれませんと、わたしは思います。つまり、神を愛することは、神様が愛して  
おられるあなたの隣人を愛することだよ、と。わたしは、これを、次のように言い換えて  
ときどき唱えています。

たいせつな方をたいせつにすることは、たいせつな方のたいせつなひとをたいせつ  
にすること。

イエスは、このひとに『自分の家に帰りなさい。そして身内の人々に、主があなたを憐れ  
み、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。』(19)と伝えました。これ  
も、神様が、自分を苦しめる方ではなく、憐れみ深いかたであることを知り、それを伝  
えることなのでしょう。そして、それは、神様にとってたいせつな他者、まず身内の人々をた  
いせつにすることでもあるのでしょう。さらに「その人は立ち去り、イエスが自分にして  
くださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。」(20)自分のようなもの  
をもたいせつにし、愛してくださいの方、神様でしょうか、イエス様でしょうか、その方  
のたいせつなひととして、隣人である、デカポリスのひとたちをたいせつにしたのかも知  
れません。

[no.24b]

三つ目は、イエスが最後の晚餐のときに、弟子たちにつたえた「新しい掟」戒めです。

---

\*53 聖書協会共同訳：12:28 彼らの議論を聞いていた律法学者の一人が進み出、イエスが立派にお答えにな  
ったのを見て、尋ねた。「あらゆる戒めのうちで、どれが第一でしょうか。」29 イエスはお答えにな  
った。「第一の戒めは、これである。『聞け、イスラエルよ。私たちの神である主は、唯一の主である。30  
心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』31 第二  
の戒めはこれである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる戒めはほかにない。」口語訳：  
12:28 ひとりの律法学者がきて、彼らが互に論じ合っているのを聞き、またイエスが巧みに答えられたの  
を認めて、イエスに質問した、「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか。」29 イエスは答え  
られた、「第一のいましめはこれである、『イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、ただひとりの  
主である。30 心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ。』  
31 第二はこれである、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。』これより大事ないましめは、ほ  
かにない」。

13:34 あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。35 互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」  
マルコ13章34節-35節（聖書協会共同訳） \*54

[no.25]

神の御心がなる世界は、神様が、わたしたち一人ひとりを愛し、わたしたちも神様が愛し、わたしたちのそばに置かれている隣人を自分自身のように愛することと繋がっているようです。そして、イエスの願いは、イエスが弟子たちを愛したように、弟子たちも互いに愛し合うことです。ただ「互いに」は、あまり簡単なことではありません。自分の努力できることではありません。互いに愛し合う世界、これは、神様、そして、イエス様が望まれる平和なのかもしれません。

激しい突風が吹いたときにも、神様が一人ひとりを愛しておられることを信じることを思い出させようとされたのかも知れません。そしてそれは、一人の枷と鎖に繋がれ、人々から阻害され、墓に住んでいたような一人のひとのために、対岸まで向かわれる道中のこともあります。そのような愛をもって、一人ひとりに接しておられるイエスを見て、「わたしがあなたがたを愛したように」を理解するということなのでしょう。

神様の御心がなる世界、それが神の国だったわけですが、他の言い方では、神様の平和かもしれません。それは、ゲラサ人の地での結末のように、人の考えるものとは異なるかも知れません。

町や村のひとたちは、多数のひとたちの力で、このひとを抑えておこうとしたわけですが、それを解放されることが、イエスの望まれることだったようです。神様の御心は、神の子イエスのされたことを通して、示されているのでしょう。もしかすると逆に、このようなイエスを、神様は、「これは、わたしの愛する子」 \*55 と呼ばれたのかも知れません。

最初に、平和とは、どのような状態なのだろうとみなさんに聞きました。それは、簡単には、答えられない問い合わせるように思います。

戦争の状態は、平和とは言えない。ある人が、枷や鎖で縛られていることによって得られることでもないようです。これは、平和とは言えないことを皆さんには、知っているかも知れません。しかし、それを排除することが、平和なのかはよく考えていただきたいと思います。イエスが説いているのは、神様の御心がなる世界を目指すこと。それは、神様の御心がどこにあるのかわからないことを考えると、神様の御心を求めることなのかも知れません。そして、平和とは、なにか、少し違うように思うけれど、神様が愛されるよう

\*54 聖書協会共同訳：13:34 あなたがたに新しい戒めを与える。互いに愛し合いなさい。私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。35 互いに愛し合うならば、それによってあなたがたが私の弟子であることを、皆が知るであろう。」口語訳：13:34 わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。35 互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう。」

\*55 マルコ1:11 すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。マルコ9:7 すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。「これはわたしの愛する子。これに聞け。」

に、自分と同じように、隣人を愛すること、そして、互いに愛し合うことのように思います。みなさんは、平和についてどう考えますか。どのように、平和を求めますか。 (49:27)

## 4.2 最後に

[no.26]

平和とは何なのでしょうか。わたしは最近、AI（人工知能）をよく使っています。平和についても、人工知能聞くと、学問的な議論に関しても、いろいろな見方を教えてくれ、かつ、本なども、紹介してくれます。スライドにも、Geminiとの対話のリンクを付けておきますから、興味のあるかたは、見てみてください。平和についての問い合わせとともに、参考文献やその内容紹介もしてもらっています。

平和とは：<https://gemini.google.com/share/268c656eef7d>

個人的には、自分で考え、さまざまな問い合わせを持ってから、AIに聞いてみるのがよいと思いますし、AIからの応答に対しても、能動的に、問い合わせを投げかけられるかどうかが、深く理解できるかどうかの鍵だと思っています。みなさんも、AIを使うときには、今日、聖書を読むときにもそうしたように、ぜひ能動的に、問い合わせながら、使っていただきたいと思います。

私は、平和について最初に考えはじめたときは、戦争へと向かわないように、分断をさけることがまずは、たいせつなのではないかと考えました。しかし、今日の箇所でも、イエスと弟子たちは、同じことを共有できていたわけではないようですし、汚れた靈につかれたひとと、ほかの町や村のひとたちを考えると、共に、平和になったということも、なさそうです。分断は、どの世界もあるのかも知れません。そのなかで、平和を求める、それは、どのような歩みなのでしょうか。最初に引用したクリスマスの聖句でも、「御心にかなう人々に平和があるように」でした。残念ながら、すべてのひとに、平和があるようにではないようです。これが、分断を助長するようなことでは、いけないと思います。分断を助長しないようにしつつ、平和を願うとはどのようなことなのか。ぜひ、考えていただきたいと思います。

最初に、独立学園は、みなさんにとてたいせつな学びのための居場所となっているのではないかと話しました。ここにいるときも、ここから巣立っていくときも、たいせつな学びの起点となるためには、ともに学ぶ仲間をもつこともたいせつだと思います。問い合わせをたいせつにしましたが、自分だけではなく、他のひとの問い合わせとともに考える、たいせつにする学びの場であることを願っています。それは、この場で互いにたいせつにしあう、互いに愛する道なのかも知れません。

「平和とは」こんなことと簡単に言えることではありませんし、このようにすればよいと言えることもないように思います。しかし、同時に、御心を求め続けること、たいせつな方のたいせつなひとをたいせつにすること、自分が愛されていることをうけとめ、互いに愛し合うこととは、深く結びついているように思います。ぜひ、考えていただきたいと思います。

(53:00)

## 備考：アジア太平洋戦争について

なぜ、平和について考え始めたか、平和について話してみようと思ったか、その理由を書いておきます。

今年は、日本では、戦後八十年と言われています。1945年に戦争が終わってから、八十年間、日本は、国として、戦争をしませんでした。戦後八十年ということで、わたしは、今年、この戦争について、いろいろと勉強をする機会を得ました。

では、まず、この八十年は、平和だったのでしょうか。八十年前には戦争があったわけですが、それは、なんという戦争ですか。第二次世界大戦と呼ばれていますが、中心は、ヨーロッパでは、ドイツと連合国、アジアでは、日本とアメリカを中心とした連合国でしたから、日本では、アメリカとの戦争を中心において、太平洋戦争と呼ぶことも多いようです。

確かに、最初にハワイの真珠湾を攻撃しアメリカとの戦争が始まり、最後は、日本の各地がアメリカによる空襲で大きな被害があり、沖縄にアメリカ軍が上陸、広島、長崎に原子爆弾が落とされ、多くの方々が亡くなられ、日本は、無条件降伏をすることになりましたから、太平洋を中心としたアメリカとの戦いということで、太平洋戦争と呼ぶのが自然なようにも思います。しかし、歴史学者の中には、アジア・太平洋戦争と呼んだり、十五年戦争とよぶ人が多いようです。議論もありますし、わたしは、歴史学者ではありませんから、ここでは、あまり深くは入れませんが、いくつか、論点をまとめておくと、以下のようにになるかと思います。

満州事変、日中戦争が続いている中で、中国を植民地化する動きに懸念を持ったからでしょうか、石油など多くをアメリカからの輸入に依存していた日本が、アメリカに石油などの輸出を止められることになり、東南アジアなどの石油を確保する必要もあり、真珠湾を攻撃することになった。

実際には、真珠湾攻撃より、2時間ほど前に、マレー半島にコタバルに侵攻していたので、中国から、東南アジアへの戦争の拡大が、この戦争の始まりであったとも言えるでしょう。

最近あたらしい統計結果が出てきましたが、日本では、310万人～380万人程度、この戦争でなくなりましたが、アメリカは、29万人程度、しかし、中国や東南アジアでは、2000万人以上の人たちがこの戦争で亡くなつたとされています。

個人的には、太平洋戦争と日本人が呼ぶのは、アジアでの犠牲者、つまり、日本の加害に関しては、目を向けず、当時も、日本と比較すると大きな力を持っていた、アメリカと闘い、たくさんの犠牲者を出した戦争だったという見方を強調したいということなのかなと思います。被害は語りますが、加害を語りたい人はいないのは、自然なことです。

しかし、本当に平和を求めるのであれば、どうして、そのようになったのか、平和とは、何なのかを考えないと、いけないように思います。どうでしょうか。最初にお話したように、若い頃に、アジアに旅行した経験から、わたしがそのような感覚を持っていることもこのように考える原因かも知れません。

## References

- [1] 「今は、つぐないの時 - 日本兵を父に持つ南の島の三万余の子らへの愛の記録」 加藤亮一著、聖文舎（1975.12.10 発行、1981.1.20 2版）
- [2] 「プーチン、自らを語る」ナタリアゲヴォルクヤン著、高橋則明訳、扶桑社（2000/08発売）
- [3] 「自由 Freiheit」（上・下）アンゲラ・メルケル著、角川書店、（2025.5.28発売）
- [4] 「アルカイダ - ビンラディンと国際テロ・ネットワーク」ジェイソン・バーク著、坂井定雄・伊藤力司訳、講談社 (ISBN4-06-212476-9, 2004.9.10 第1刷発行)